大阪・関西万博「会場計画」

昨年 12 月、BIE 総会がオンラインで開かれ、略称「大阪・関西万博」が承認された。やっと仮免許から本免許になったが、世界を揺るがすコロナ危機で前途は多難である。

写真は年末に公表された「2025 年日本国際博覧会基本計画」。テーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」に沿って、万博計画が書かれている。会場である人工島・夢洲で開催することに異議を唱えてきたが、どのような会場計画なのか、写真をもとに解説してみたい。

2 枚目の写真は、上から見た会場計画である。埋立工事や地盤条件等を考慮し、万博会場を 3 つのエリアに分けて構成する。パビリオンワールド（パビリオン等の施設が集まるにぎわいのエリア　65.7ha）、ウォーターワールド（水景を活用した憩いのエリア　47ha）、グリーンワールド（会場の西側の海に面した緑地エリア　42.9ha）。

パビリオンワールドのパビリオン等各施設は、バビリオンワールド内のリング状のメインストリートと、メインストリートにつながるように離散的に配置する広場に面している。このメインストリートがパビリオンワールドの主動線になり、来場者はこの明確でわかりやすい主動線を移動して、パビリオン等の各施設にアクセスすることができる。この主動線の上部には大屋根（リング）を設置する。この大屋根（リング）は来場者を雨や日差しから守る機能を持ち、人々を導くナビゲーションの役割も果たす。大屋根（リング）の上には空中歩廊が巡り、パビリオン群が立ち並ぶ会場を俯瞰する視点を提供し、場所によっては斜面や段々、また海を望む展望歩廊を用意して、人々が思い思いに過ごすことができる居場所をデザインする。

プロデューサーの「作品」を紹介したが、どうも愛知万博の会場計画を思い出してしまう。それにパビリオンワールドは、密集した空間にたくさんの施設をつめ込んだ感じだ。新型コロナを踏まえた会場計画なのだろうか。コロナ禍の「３密対策」は大丈夫なのだろうか、心配になってくる。それより懸念するのが、会場計画の設計変更、とりわけ「目玉」の 350 億円に膨らんだ大屋根の設置に伴う会場建設費の膨張だ。ぼう―となんかしておれない。東京五輪と同じく、大阪万博も経費増と地元負担膨張の構図だ。

（2021 年 2 月 24 日）